

グローバルゼーションを考え直す

ながれ

石川 武 (いしかわ たけし / 三共精機株式会社 代表取締役社長)

3月中旬から一気に、世界はコロナ一色に塗り潰された感じがします。合理性と科学礼賛に支えられ、善きものとして推奨された「グローバル化」が、皮肉なことにウイルスの拡散を世界に広げる、格好のアクセル役を演じてしまいました。

1. 環境と経済

昨年9月国連気候変動サミットで、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリ（当時16歳）さんが、世界の指導者に対して、「最も危険なのは何もしないことではなく、本当の危険は政治家やCEOが実際の行動が起こっているように見せること。巧みな説明や創造力に富んだPRは別にして、実際には何もされていないということです」と、強烈な言葉でダイレクトに世界の「大人」を批判しました。COP25を「各国が抜け道を交渉する機会に変わってしまった」と喝破し、「次の10年が地球の将来を決める」と、危機感をまっすぐ表現されました。そのあまりのストレートさに、世界中の一部の「大人」が怯み、「理想と現実」や「子供に何がわかる」や「経済効果」などの理屈を並べて、一人の16歳の少女に「大人げない」、斜め上からの「反論」を浴びせかけました。グレタさんが言ったのは、要するに本気で地球環境のことを考えるなら、経済活動を制限するべきだという主張だったと思います。それを世界中の「政治家」や「CEO」が嘲笑し、経済活動は続けられました。

2. ウイルスと経済

偶然ですが、そのインパクトが少し薄れてきた（意識的にマスコミが封じ込めてきた？）

タイミングに、世界中でコロナウイルス騒動が起きました。考えないといけない最も重要なことは、このようなウイルスがなぜどこから、今年になって突如発生することになったのか、という原因究明だと思いますが、一旦そのことは置いておくと、コロナウイルス拡散の結果として、世界中の「政治家」や「CEO」が、経済活動を停止させざるを得なくなってしまいました。現段階（2020年4月上旬）では、都市封鎖を強行する国もあり、とにかく感染拡大をどう防ぐのが最優先にされています。ただ現象面だけを見ると、言論の力では全く止まらなかった経済活動が、「恐怖」の力であつという間に、あっさり止まってしまったという事実には少し戸惑ってしまいます。このことは、こうでもしない限り「大人」は、経済活動を自制することができないのか、という残念な発見でもありました。原因はどうあれ、「やればできる」のだということもわかりました。

3. グローバル化の現実

弊社にも現在、マレーシアに現地法人があります。2017年秋に設立し3年が経ちました。かつて2010年に中国北京に初めて現地法人を設立し、紆余曲折あって2015年に撤退をした経験があります。「グローバル化」という言葉には、どこかカッコいいイメージがありますが、私が実感した「グローバル化」には、泥臭いことしかありません。中でも一番大きく心を占めるのは、心配です。現地法人の状況や、赴任している社員のことを思うと、とにかく何かある度に、大丈夫かなと心配ばかりが増えます。ご家族のこともある。たとえ何もなくても、病気になってないかとか、トラブルに巻き込まれて

いないかとか、現地の人とうまくやっているかとか。インターネットですぐにつながるとわかってはいても、物理的な距離をすぐに埋めることは当然できず、文化や気候や政治体制の差を、常に心配している気がします。今回のようにコロナウイルスの感染者増や、ロックダウンなどの対応がどのような形でいつまで続くかなど、過去に事例がない場合はなおさら。経営者にとっては、こうした新たな心配事をわざわざ引き受け、それでもやる覚悟こそが「グローバル化」です。

4. 去年までの問題

時間を少し巻き戻すと、今年の今頃世界中の注目は、地政学リスクでした。世界はインターネットでつながり、LCCが人の移動を手軽にし、5GやAIのテクノロジーの進化によって、益々グローバルに「つながる社会」が実現していくように見えていました。しかしその一方で、米中貿易摩擦、Brexit、ブロック経済化、宗教対立、格差問題等、「つながる社会」とは真逆の、「分断された社会」を作ろうという流れが加速して、各地で地政学リスクが生じていました。相反する2つの価値観が、同時期に併存していたことになります。この一見表面的な「いいところどり」に見える事態を、本当に新しい流れだと解釈するならば、国やお金や民族や会社などという、伝統的な枠組み自体を解体しなければ、その先の答にたどり着けない。私達はその瀬戸際まで来ていたのに、まだ、理性よりも欲望でしか動けないという現実の前で、堂々巡りをしてきたのかもしれない。結果、人ではなくウイルスが、パラダイムを変えてしまいました。

5. 去年までの希望

もう一つ同じ時期に動いていたのが、2015年に国連で提唱されたSDGsです。日本でもオリンピックや万博等の経済効果や、ESG投資や教育の面から、企業や行政や学校の取組みが活発化し、ようやく少しずつ浸透しつつあった

と思います。これは「グローバル化」の善い側面だったと言えるでしょう。弊社では2018年から3年間の中期経営計画を、SDGsの考え方も盛り込んで策定しました。SDGsという補助線を引くことで、弊社がこれまで取り組んできた、障がい者や外国人雇用、子育て支援、森づくり活動などを、全て新たな視点で事業活動全体の中で捉え直すことができました。そしてその考察は「新・ダイバーシティ企業100選」、「健康経営」にもつながりました。SDGsの17項目は、将来その企業が成長していくために、何を大事にしようと考えているのかを示す指針となります。それは「内なる真の」問題だから、ISOのようにマークや外部認証は必要ありません。必要なことは、その組織に本当にやる必要があって、各員が本気でやっていることそのものです。グローバル化は巻き込まれるものではなく、自分達の軸を持った上で活用すべき必然的な流れです。

6. グローバル化再考

人はグローバルに協力しなれないとなし得ない環境問題のようなテーマを、理性だけで超えることが、これまでのところできていません。その一方で、パンデミックが起こるかもという恐怖心の前には、一瞬で経済活動を止める力があり、本気になれる力は理性より欲望の方がはるかに強いことがよくわかります。本質的には「分断化」が進んでいた、これまでの「グローバル化」は、それを単に己の経済合理性だけで捉えようとした、自己中心的な発想の結果だったのではないかと思います。

私達は海外事業を展開する時や、外国人社員を雇用する時に、新しく接する国の人や文化に、多かれ少なかれ影響を与えてしまいます。グローバル化に大切なことは、その未知の世界への夢と敬意と理解の中にあるのではないのでしょうか。未来に果たす役割は何か。それぞれの答へのチャンスが、グローバルな世界に広がっているのだと考えます。